

回想法を用いた展示による交流と資料価値の創出

「回想法」とは

回想法は、対象者の回想に伴う思いを、共感をもって傾聴し、その思いを今と未来に活かしていく援助技術である。懐かしい写真や生活用具などを用いて、かつて自分自身が体験したことを語り合い、過去のことに思いをめぐらすことにより、脳を活性化させ、気持ち（心）を元気にする心理・社会的アプローチでもある。

回想法は1960年代に欧米諸国から始まり、1990年代、その研究が進んできた。わが国でも病院や介護保険施設を中心に、認知症の非薬物療法の一つとして、ケアのツールとして実践されてきたが、地域ケアとしての取り組み例は、2002年までほとんど例がなかった。

1 地域回想法と博物館

(1) 地域と博物館資源

様々な地域において回想法を用いた高齢者ケアや地域高齢者の支援事業などを実施していく際、地域の歴史や民俗、いにしえを知るための資源、また、地域に暮らす高齢者の生活歴などを理解する資源として博物館や歴史民俗資料館などの活用が有効的といえます。

認知症ケア、認知症予防を含め地域住民として的高齢者ケアを考える際、その地域に暮らしている人と人とのつながりが重要となってきます。高齢者同士はもとより、高齢者その他の世代層との交流も含め、その地域を、または地域に暮らす人を意識することが必要となってきます。

(2) 地域に既存する資源の活用

北名古屋市では、回想法を実施するにあたり、実践する環境（場）は対象者、指導側にとって極めて重要な意味を持ち、昔から使い慣れた物や雰囲気、居住空間等の連続性があれば、回想法実践において対象者の心理面に良い安定を与えるものと考えています。

歴史民俗資料館の展示空間には、そうした要素が含まれているとともに、回想法センターを併設した「旧加藤家住宅」には、明治時代から昭和戦前期の暮らしが今もなお息づいているから効果的です。

(3) 生活歴を知り活用する

高齢者の暮らしてきた時代を理解することは、その人の人生、人格、そして今を理解することに直結します。また、歴史的背景は同じはずでも、影響の受け方は、生活環境によるところが大きく、個々に差があることも念頭におく必要があります。

高齢者の生きてきた時代をケアに生かしていくには、一人一人に異なる暮らしの背景を知り、それを尊重し、その人との緊密なかかわりを保つ姿勢が大切です。高齢者自身の回想などを促し、高齢者の言葉や反応からその人自身の生活してきた時代を把握するという過程が求められています。

2 北名古屋市歴史民俗資料館の取り組み

(1) 昭和日常博物館の試み

歴史民俗資料館で「昭和時代」を扱う。どうして？と不思議がられる活動としてスタートしました。平成5年のことでした。現在では、博物館・資料館はもとより、商業・飲食施設においても昭和時代、特に昭和30年代という設定が持つ集客力を活用しています。

(2) 昭和生活資料を文化財として

様々な展示会を通して資料館に集まってきた資料は、単に懐かしさにとどまらず、大切な博物館資料として扱っています。現実には、捨てられるべき消耗品、廃品と紙一重の存在ですが、一点一点が積み重なり時代を象徴する一群となったとき、かけがえのない文化財として認知することができるかと確信しています。

(3) 昭和の暮らしを収集するということ

昭和時代をテーマとすることにより、その時代を経験的に知る多くの来館者がより密度の濃い情報を館内で披露していただくことができる場所となり、博物館と来館者の間に新しい関係が生まれました。

近年、社会的な昭和時代のブームが訪れました。経済の閉塞感、いわゆる不況の時代にあつて、過去を商業ベースで扱う機会が急激に増えました。博物館においても、学術的、教育的な意味合いで昭和時代の資料を収集、保存する活動を始める施設が増えていきます。

(4) 懐かしさの効用

本館では昔の面影そのままの農家や、昭和 20 年代、30 年代の姿を再現した路地裏、さらには、同時代の設定で駄菓子屋、理髪店、食料品店、自転車店などの店舗を実物資料で再現しています。ゴミ箱の中身を再現できるレベルでモノを集めていこう、残していこうと考えています。

資料館に一步足を踏み入ると、一見するなり「懐かしい」という言葉を発してしまう。展示されている、かつて自身が手にし、味わった品々についての様々なキオクを思い出せば黙ってはいられない、という様子がよく見受けられます。それは、「昭和時代の展示」イコール「今生きている人々のキオク」の展示だからです。

来館者が発する言葉は、自らの経験、キオクに基づいています。言い換えれば、博物館が多くの方々のキオクをも資料として扱うということになるのです。

(5) 博物館と高齢者ケアとしての回想法

「回想法」とは、懐かしい生活道具などを用いて、かつて自分が体験したことを語り合い、過去に思いをめぐらすことにより、生き生きとした自分を取り戻そうとするもので、展示会場では、自然多発的にキオクが掘り起こされ、来館者の笑顔を引き出しています。

また、老人ホームやデイケアサービスなど、高齢者関連施設からの見学も相次いでおり、引率者は「高齢者が、普段とは異なった生き生きとした表情を見せている」と口をそろえます。

懐かしいものには、人々の笑顔を引き出すチカラがあります。

この事業は、国の厚生労働省の補助事業として採択され、社会福祉施設整備事業における介護予防拠点整備事業の補助金により回想法センターを建築し、老人保健事業推進費等補助金（老人保健健康増進等事業分）によって各種事業を実施する運びとなりました。

そして、本館と収蔵資料及び明治時代の旧家である国登録有形文化財「旧加藤家住宅」を活用し、福祉と教育と医療関係者が連携しながら回想法を用いた地域高齢者ケアを行っていくスタイルが確立され、平成 14 年度には「旧加藤家住宅」内に国内最初の「回想法センター」が開所しました。

現在も、保健師を中心に歴史民俗資料館、回想法センターが主体となり「北名古屋市思い出ふれあい（回想法）事業」として多くの高齢者の参画を得て、さまざまな回想法関連事業が地域で展開されています。

(6) 回想法キット—博物館が行う高齢者を抱えるケアの現場への資料提供—

本館では回想法を支援するため、また、博物館資料を資源化し社会還元する仕組みとして、平成15年10月から所蔵する実物資料と、回想法ビデオ、解説書などを梱包した回想法キットを製作し全国の高齢者施設や病院、自治体への貸出を行っています。

(7) 「お出かけ回想法」の提案

昨今、回想法の普及にともない、懐かしい道具を展示する博物館や古の設えをそのまま残した建物などへの、在宅高齢者や施設入所高齢者の見学・利用が急増しています。特に回想法を取り入れている本館では、こうした機会を「お出かけ回想法」と称し、場の提供とサポートを行っています。施設などのお出かけ行事が、積極的に回想法に基づいて行われるとしたら、ケアのなかに「お出かけ回想法」というスタイルが定着することが想定されます。

3 生涯学習と回想法

(1) 生涯学習と回想法

生涯学習社会の実現に向けての取り組みが文部科学省を先達に実施され、新たな局面を迎えています。平成16年3月、中央教育審議会生涯学習分科会による「今後の生涯学習の振興方策について」という審議経過報告には、今後重点的に取り組むべき分野として、「健康対策等高齢者への対応」が掲げられています。

なかでも、高齢者の学習活動への参加を促し、多様なニーズにこたえ学習成果を活用できる機会を充実していくことが求められています。

また、団塊の世代の高齢化にともない、医療や保健、介護などの社会保障関連経費の増加の問題が指摘されており、すみやかな対応を図ることで医療費などの増大の抑制につながるとその重要性が叫ばれています。

そこで、生涯学習と高齢者ケア・認知症予防を積極的に結びつけ、そのコネクターとしての回想法の役割の重要性を感じています。

(2) 高齢者ケアに博物館という場の提供—モノ語りの博物館講座

回想法を地域の介護予防事業として取り組んでいる北名古屋市、回想法の材料となる懐かしい資料を収集し展示している歴史民俗資料館では、「モノ語りの博物館講座」を開催しました。これは、回想法という手法・方法論を生涯学習講座という形で健康な高齢者に提供し、認知症予防を含め、学習、自己啓発の機会としていただいたものです。

参加者は、8回のセッション終了後も、定期的に集まる機会をグループの力で設けています。懐かしい時代を展示として扱っている本館には、その時代の経験者でありその時代を語る達人ともなった回想法参加者は、大切な博物館の一員となりました。ボランティアとしても博物館の展示の説明、展示の季節ごとの変更、さらには次の展示会の準備においても様々な記憶を提供していただくように展開を図っています。

この「モノ語りの博物館講座」に参加いただいた高齢者には、今後もグループ回想法の手法のなかで様々な記憶を提供していただく計画です。これにより、長期的に回想法を通して、自らの健康を保っていくよりどころとして生涯学習施設である博物館を利用していただくことが可能となりました。

さらには、歴史民俗資料館という施設が、生涯学習を担う施設としても活動していくには、地域との連携が不可欠です。その点で、回想法を用いて地域高齢者と深い関わりを成立させることができた点は、今後、歴史民俗資料館の資料を媒体として地域の高齢者同士だけでなく子

どもたちを結び付けていくことが重要であると考えています。

(3) 地域博物館の取組み－実践例

地域の高齢者をケアしていくひとつの拠点として、博物館等が活動を始め、実践しており、効果と課題が提示されています。

回想法の取組みを実践している博物館は増加しており、江戸東京博物館、葛飾区郷土と天文の博物館、龍ヶ崎市歴史民俗資料館、能登川博物館、亀岡市文化資料館、奈良県立民俗博物館、三田市「ふるさと学習館」、愛媛県立歴史博物館、筑紫野市博物館、熊本市立博物館ほか、各地で展開されています。

平成22年11月20日、21日に開催した「北名古屋市回想法シンポジウム－地域回想法最前線」では、兵庫県三田市「ふるさと学習館」、愛媛県立歴史博物館「れきハコ」、滋賀県東近江市能登川博物館の取組み、筑紫野市博物館の取組み、岡山県立博物館の取組みなどが事例報告されました。

博物館の展示活用、講座、貸出用キットを高齢者向けに使う、子どもたちとの交流、「昔の暮らしを学ぶカリキュラム」への応用、学校との博学連携事業、博物館と福祉の博福連携事業など多様な展開が見られます。

- ・教育普及活動と回想法－高齢者へのソフトプログラム
- ・ワークショップとしての回想法
- ・アウトリーチとしての回想法－回想法キット、高齢者施設などの訪問
- ・世代間交流・伝承学習としての回想法
- ・地域資源の活用と人材育成・ボランティアによる地域づくり

□北名古屋市歴史民俗資料館 回想法関連研究紀要

『昭和日常博物館の試み－昭和日常博物館の可能性』2007

『地域回想法の可能性－多様な導入形態と地域への効果』2009

『昭和の暮らしに学ぶ－学習教材としての展示』2010

□関連書籍（いずれも河出書房新社）

『昭和路地裏大博覧会』2001

『キャラメルの値段』2002

『昭和夏休み大全』2004

『昭和に学ぶエコ生活』2008

『地域回想法ハンドブック』2007